

りも良いのだ。すべての事は考へ方一つで決定されて来る。藝術だつて信念に向つて自己の耕作々業なのだ。先程何故あんなに藝術論をやつたのか。唯無意味に、残るものは論じた後の寂漠だけだ。親鳥が雛の突つき合ひを見て笑つてゐる。親鳥だつてとやをして、鎧を備けかへすのだ。しかし沈黙に依つて悲痛を消そうとする。それは青年には望まれなく、將來を目ざして論ずるがいい。時が解結してくれ。

時代が藝術を變遷して呉れるから今ミケランデロが居ても躍動した裸體を繪くだらうか。ラファエルは未だ羽の生えた天使の空を飛ぶ姿を想ひ出すらうか。おゝモナ・リザは今何處で笑つて居るだらう。ダ・ブイッチは地下で泣いて居る。時は生命を奪ひ、星はずん／＼廻つて居る、しかし北極星も動くといふが何時になつたら西へ見えるだらう。ピラミットの穴はその時代に於ける北極星の位置を示してゐて、少しづゝの變化があるそう。今エジプト人は宗教をどれだけ考へたか解かる。王の石棺に何時も穴を通して、北極星の光を入れやうと考へたそう。ほんとにそうだとすると始めて、砂漠の襲來にも威然と建つてゐることも、どれだけその時代に大きさを考慮したかである。現代人も大きさを目標に進んで居る。物體的と知識とに於てどれだけ考へて行くか。物體知見方は原始的で、知識の見方は現代的であらうとも、位置と時代が左右してくるのだ、位置には材料が地理的に未成的にも既成的にも影響して来る。

時代は科學であり科學に依つて洗練された認識である、ヘーゲルも言ふ如く、天才を知る者は天才より外にないと、今この言葉を引用して時代は單なる流行とは異なる。しかし流行患者に満たされた世界が出来たとすると、その時代は流行といふ輕薄な意志病に促はれて文化は亂れだすのだ。しかし流行は或る點人を新らしくさせるが永久性がない。これは直觀に依つて明かである、今茲に直觀といふ危険な言葉を用ひた、しかし我々が直觀といふことに依つてどれだけ知らず知らず進んで行くか、——といふこと、それに依つて信念を生んで行く、人材の差異に依り信念の遠近も可決さるべきだ。あゝ俺は畫を繪かふとして居る、そして何處まで進歩して行くかは分からない、しかし流行だけに世間が走つてくれないだらうと信頼して居るのだ、死んで行くまでそんな心配はしたくない。時が來れば死んで行くから、こんなことを考へて居たら一番電車が走り出した、明日ある身だ、そして又男と女の長い列が前を過ぎるのを見るだらう、あるものは戀の奴隷であり、退屈と詰らなさの奴隷でありこの世の贅澤なものに對する貧慾の奴隷たちである。又、人生の暗い恐怖の奴隷たちが歩いてゆく。又、その多

くの人々の中を偉大で聰明な觀察者も次第に過ぎた。

秋になれば透き徹つた空氣の中に、裸になつた木や、狭い家や、その間を奇妙な人々が動いて居るであらう、輪廓が鋭く彫られて、黒い土の上を、ずん／＼進んで行くのは面白い、道路に長い影を投げながら。青くて廣い地平線は、青白い空の中に溶けこんで、その吐息は、氷つた泥で埋つた地上の上を恐ろしく冷かにさまよつてゐる。晩秋は木立が裸體になつて來れる、しかし寒さの中で風に吹かれながら、ほんとの孤獨であるが故に、將來への鋭さがある。男に骨格を見破られた女性、肉體如何は無意味にされる、彼女は男の中に平凡に對して異議をたてる一つの生々とした強い言葉も持つて居ない。男が若いときには平凡といふことは、單に娛樂で詰らぬものに思へる。しかし平凡は序々に男を捕へてしまふ。

突然渴した狼が小羊を食べるが如き眞似は人間ではないのだ、男と女は革袋に水を背負つて、砂漠を旅行するやうな者だ。旅行する相手になれぬ者と、敢て旅行する必要はない、途中死にでもしたら迷惑だ。危険なことだ、その恐ろしさよ、嗚呼星はずん／＼廻つて行く、未だ人間の生れ絶へたこともなさそう。やがて冬日の冷めたい陽が部屋に満ちる頃、目が覺めるだらう、俺は星の廻るのを知つたのも今夜だし、自己を知つたのも、今夜だつたのだ。

——一九三三・十一月——

## ロダンのお花さん

西・三 神 田 美 一

お花さんはもう七十幾つだし、それに長いことの中風で、不自由な體なでしたが。

突然尋ねて行つた私へ心よく會つてくれました。

柔和らかな線の脛を蒲團の上へのせて、緩やかに目だけを動かし乍ら、やゝ鼻がかつたかすかな聲で、

「私がつと元氣なら、そのときのことを種々話してあげただけだ」



やがて奥からは、大切そうに、桐箱が二つ運び出されて。ウコンの布や、も一つの綿の包みを取離すと、お花さんは

「そうく」と、思出すやうにその彫刻に觸れてみた。……

「ロダンさんは私の……、丁度日本刀で切りつけられたその刹那の、苦しそうな。……舞台姿をそのまゝモデルにしたいと。何度も頼まれたので、遂ひそのお家へ行くことにしました。」

そしてそのときの作品がこれなのです」

と、並べられた日本髪「死の首」を差して（これは塑造のまゝで全然未発表のもの。尙外の一つはブロンズになつてゐる所謂「花子の首」である）

「ほんとうにこの眼なぞは何回もくづつこわされて、終ひには私も嫌になる程でしたが……しかし暗いお部屋でローソクをつけて黒いカーテンの前に置くと、とても、こわくて私は、もう恐ろしくなります。」

お花さんは、天井を見返りつゝ靜かに目をとじた。

傍にゐる妹さんも、ほんとうにそうだと云ふやうに、ジツと……その「首」を見つめてゐる。

私も、にじり寄り乍ら黙つて見てゐた。

腫の部分が虚ろに、白く光つて、……今にも引き吊つた唇から、ガクリ……と小さく斷末魔の一ト噺が洩れて來そうだ。……

弾力のある肉へ喰ひ込んだ太刀先を、グツと力をこめて、手許へ引けば、肩先からは、

まるで油壺のやうな音を立てゝ、生温い血潮が迸ばしり……お花さんの振袖も……帯も……ねつとり赤く染まつて行く……

やがて、元結のゆるんだ大きな髪も物狂ほしくのたうち廻る……。

思はず取上げた湯呑の糸底にさえ生々しい血の冷さを思はせる。

と、齒の浮くやうな無氣味さが、ヒヤリ……首筋へ流れ込む。

それにまたこちらのブロンズは、（花子の首）

何んと云ふ和さだ。

暖く滑らかな額から鼻へかけて能の面に見るやうな線。

情熱を秘めた小さな唇や、

愛情豊かな「あご」の邊り

それこそ誰も居ない何處かで、ソツと抱き締めてみたいといはしさが、次々こ湧き立つて來る……そして、だが、……やつぱりロダンの理智は、もう一步の處で、危く私達を、ホツと落着かせて終ふ魔術を心得てゐるらしい。

この二つを前にして、今更のやうに、

「何んでロダンつて奴は、恐ろしい奴なんだろう」と思つた。

暫くしてお花さんは

「そして、ムウードンの美術館の初めの入口の上に。ロダンさんと私のマスクが、こう云ふ所の兩側に掲げて御座います」

と細く脂氣の抜た兩手を差上げて

「あなた方も何れは、向ふへお出でになつて、よく御覽になることでせう。

そしたら……何時か、こんな話を……花子がしてゐたと思になるでせうに。」

だんく言葉が淋しくなつて行く。

また

「ロダンさんの臨終には、お會ひ出来なかつた私なのに。

だけど。……

ロダンさんはお遺言になつてこの二つを贈つて下さいました。



ほんとうに優しいお方で  
こんなことも御座いました。……

何時だつたか……私がぼんやり アトリエに突立つてゐるとき——

ソツと背後から、小さな子供のやうに抱き上げて——

ほんとうに驚かされてしまひました。

そして、ロンドンへも一しよに連れて行つて貰つたりなぞしました。」

と淋しくも また瞬間若やいで、お花さんの顔に美しいほゝえみが湧いて来る。

その當時女優であつたお花さんは、二十幾年もの長い月日を、その一團と共に巡業の旅をつゝけてゐた。

若かりし幾多の感傷も、

今は昔の……このお花さんも……

僅かに残る二個の土塊と秋枯れて行く一つの肉體だけでした。

「バルザックの像」や「青銅時代」其他が、この日本へ、はる／＼送られて來てはゐるが、しかし——そのロダンの心根を引いた最奥のものは、むしろ日本である。それよりも、もつ／＼……たつた一つ……このお花さんの居る地であればこそではなかつたらうか——。

然し嘗てはこの「花子の首」さえも、お上では、——何の間違ひか——お花さんの手許へは、なか／＼渡されなかつたとか。

「だから正木さんや、高村さんに云つて、やつと戻して貰ひました。」  
と老いの目に一抹の悲憤が洩れて来る。

そうだ私は誰にも知らせてやりたい。

ロダンのお花さんは……今はもう……

或は……田舎の町で、二度目の長い旅に出てしまつたかも知れない。……

「新駒」家の裏座敷で、……あの妹さん達に見守られつゝ永遠にロダンの「首」に、なつてしまつたのかも知れない。

私達の及びもつかない遠い處の巨匠ロダンその人さえも……ほんとうに、……こんなに近い世界に生きてゐたのだつた。

それにつけても——

ヒョツとしたら、あのお花さんと共に何れは岐阜の地を去つて行くであらう。ロダンの「首」にも一度どうかして逢ひたいものだと思う。

## か ど で

西・一 村 本 良 三

これは一體どうしたことだ。

鏡の中の自分の顔を見てゐると唾をかけたいほど憎らしいお前の名は！ 自分で自分の名を呼んで見ると冷汗が出るお前は一體誰？ それは生きてゐると云ふ事實です現實です何うしてこんなつまらないお前の現存がゆるされてゐるのだらう。

人生の旅路は冒険です。

未來將來その前途は見えやしない。一寸先が闇だ。又それを二度とやり直すことは出来ない。反覆すること繰返へしと云ふことは赦されないことだ。過去に於て幾萬億の人間は生れそして死んだ併しそこには一つの襲用すべき型が発見されたとても云ふのかそんなことはあらう筈がない、或る部分の共鳴に同感はあり得るが、それが